

## いま海女に 沿岸漁業の再生を託そう

石原 義剛 海女振興協議会  
海の博物館館長

志摩半島では「海女さん」をユネスコ世界無形文化遺産に登録する活動を進めています。

現在、日本列島には18の県に2174人(2010年・海の博物館調査)の海女がいます。これまでの調査で、もっとも多かった昭和31年の17611人(東邦大学・額田)からみると8分の1に減りました。海女のいる県の数も26から18県に減っています。

日本における漁業者数も著しい減少を示していますが(1949年109万人→2012年20万人)、海女の減少はそれを越えます。

今年の4月からNHKが朝ドラで「あまちゃん」を放送開始したことで「海女」が話題を呼び、志摩半島でもメディアの取材がこれまでになく多く、東日本大震災からの復興支援の意味もあつての放送と聞きますが、海女の存在が広く知られることは、なにはともあれ嬉しいことです。

全国の海女の5割近くが現存する三重県で、平成24年6月、鳥羽市と志摩市、海女973人に両地区の漁業協同組合、観光・商工団体それに学識経験者などが加わって、海女振興協議会が結成されました。

結成の目的は、第一に海女漁の振興、そして海女文化のユネスコ世界無形文化遺産への登録です。

海女数の減少と高齢化、後継者の不足により、海女漁を中心とした海女文化の危機にある現状を、どうしても再興したい強い決意のもとに出発しました。

海女・海女文化をどうして存続させねばならないか。今、わたしたちは以下の5つの漁業と漁協 2013・8

主張を掲げています。

1つは、「女性の素潜り技術」。

海女は、ごくありふれた暮らしのなかの女性により、素潜りという独特の潜水技術による漁法をもって自然なる海のエモノを取り続け、長い時間、持続してきた生業の素晴らしさです。このような独立した女性の存在は他に例はありません。

その技術は、深さや海流・潮流を熟知した潜水技術を中心に、海底地形、地質やエモノの生態を知り尽くしています。海女は浅海の智者です。

2つは、「女性によってうけつがれた歴史的価値」。

海女は少なくとも日本列島において縄文時代から現代まで3000年以上にわたって、これほどの長い歴史、伝統を保持している素晴らしさ、それは世界に誇るべき価値を有しています。それは女性ならではの優しさ、持久性、生命力から来ていることなのでしょう。

3つは、「持続性」。

海女漁の持続性・継続性に大きな意味があります。古代からほぼ近世までは無意識のうちに行われてきましたが、近世になって三百年くらい前からは、強いはっきりとした意思をもって、漁獲対象とする資源を、「獲り過ぎないように」「獲り尽くさないよう」守りつづけているのです。今日という資源保護の発案者であり実践者なのです。

資源を持続的に維持するため、海女は多くの約束事を決めて守っていますが、決めることは簡単でも、守ることは至難のことです。この約束事を守ってきたのは男でなく女性の海女だったからこそ可能だったことです。

その対象がアワビであるところに意味があります。古くからアワビは不老長寿の妙薬として珍重されてきましたが、今日では純良な

たんぱく質食品であることが証明されています。言うまでもなく美味な海産食品です。さらに、海藻類はアワビの食べる餌ですから採り尽くさぬように、採集日数に制限を厳しく決めて守ってきました。若い布と書かれるワカスは、海藻類の代表として、生命の成長をうながす食品として重要だったのです。それを採るとともに守り続けたのが海女だったのです。

4つは、「共同体」。

海女は、人々が助け合いながら暮らす集落すなわち「漁村共同体」の要なのです。今の時代、あらゆる生産手段がロボット化する中で、人間自身の労働技術が失われるとともに、人間が主人公の共に助け合い暮らしてゆく「共同体」までもが、不要物のように考えられ崩れかかっています。その中で、海女がなんとか共同体を支えている意味は大きいものです。

そこでは人間の“絆”が生きつづけています。海女は親・子・兄弟姉妹はもとより地区全体の行事に参加します。事故があつたり甲斐があると、集落の総ての人々が漁を休んで心配をします。集落に暮らす人々と一体となっています。結婚や出産は集落全員で祝いますし、祭祀も全員が参加して行います。

今日の潜水作業を終えた海女たちが、同じ船仲間・「火場」の仲間です。おしゃべりの時間をみなさまはご存じでしょうか。そこでは日常のすべてが隠し事もなく話され、腹の底からの笑い声が絶えません。海女たちは暗い時代をふっとばして生きています。

最後に5つは、「自然環境」。

海女が活動の場としてきた海は漁村では磯と呼ばれて来ましたが、近年では『里海』とも呼ばれる「海の森」であり、この里海を守り育てるのが海女たちなのです。この里海は海藻の森によってなによりもアワビ、サザエに十分な餌を供給しますし、たくさんの酸素を自然に放出しながら、魚介類に産卵場と隠れ家を提供する結果として、海女に漁獲物をもたらしてくれています。素晴らしい自然の生態系、生命系が保持されています。海女の海は、世界人類の偉大な財産であります。海女は海の自然環境を守りながら、漁をしているのです。海女は海なる自然と共存・共生して暮らしてきたのです。

この役割は、大量漁獲ばかりに盲進してきた現代の漁業が見失っていたものです。海女に「海守り人」になってもらいたい、いやこれは海女以外に出来ない役目です。

漁業の更なる近代化が進むでしょうが、一方で、もっとも伝統的な漁業が、現代の漁村を再生させると、わたしは確信しています。海女がその先駆けになることでしょう。

本年10月27日、過去には志摩市・鳥羽市のみで開催してきた、全国の海女を一堂に集めて交流を図る「海女サミット」集会をはじめ石川県輪島市で開催することになりました。多くの関係者の参加をお待ちしています。



『目で見ると鳥羽・志摩の海女』  
海の博物館 編  
2009年6月発行  
「近年、海女は高齢化し、後継者が少なく、この海女が生み出した伝統と文化がいつまでつづくか心配されています。本書は、そんな海女の作業、道具、習慣、風俗、獲物などから、歴史や文芸まで、海女のすべてを理解していただくために分かりやすい図解としました」  
はじめにより抜粋